

英語史に見る「記憶」を表す語彙分野の変遷 ——古英語・中英語を中心に——

十重田 和由*

本稿の目的は古英語から中英語にかけての「記憶」を表す語彙分野⁽¹⁾の変遷について考察することである。特に、現代英語 *mind* に先行する語形である古英語の *gemynd* と、現代英語で「記憶」を表す主要な語である *memory*⁽²⁾ に着目し、これらの語が「記憶」を表す語彙分野とどのように関わってきたかについて研究する。「記憶」を表す語彙分野は古英語では *gemynd* に支配されていたが中英語初期ではその姿はなく、その後借用語の *memorie* が中英語中期以降勢力を増し、現代英語へといたる。本稿では、このような変化にはどのような背景があるのか、また *gemynd* から *memory* への変遷期にあたる中英語ではどのような使用実態があるかについての検証および考察を行う。

キーワード：語彙分野、記憶、古英語、中英語

1. はじめに

現代英語で「心」を表す代表的な語 *mind* は古英語では「記憶」を表す代表的な語であった。その一方で、現代英語での「記憶」の代表的な語である *memory* がラテン語から来るものであることはラテン語族の言語について知識を持つ者は容易に想像できる。この二語の関係を単純に図式化すれば *gemynd* が「記憶」を表さなくなり、その穴を埋めるためにラテン語の *memorie* が使われるようになったという説明になるが、実際にあった意味変化、語彙分野の変化はそのような単純なメカニズムであるとは言えない。そこにはいくつか不明な点がある。一つは、借用語である *memorie* が何故その語彙分野を占めるにいったのかという疑問である。もう一つは、*memorie* が英語に現れるのは中英語中期であり、それまではどのような語が「記憶」の語彙分野をどのように支配していたのかということである。

古英語の「記憶」を表す語彙分野において初期古英語から後期古英語、そしてそれ以降にかけて変

* 人間科学総合研究所研究員・東洋大学経済学部

遷があったことは Godden (1985)、Smith (1996) などにより指摘されている。また、古英語の語彙を概念別に分類した *A Thesaurus of Old English* (以下 *TOE*) で「記憶」の概念に関連する語彙分野を見てみると *gemynd* が優位性を持っていることがわかる。実際に古英語の作品では「記憶」を表す語として *gemynd* は多く使われている。

本稿では古英語期から中英語中期にかけての「記憶」を表す語彙分野の変遷を通時的に分析し、その変化の理由について考察を行う。古英語から中英語にかけての「記憶」を表す語彙分野での二つの変化に着目し考察を行う。一つは、古英語で「記憶」を表すのに重点的に用いられていた *gemynd* が中英語ではその「概念」を表すのに使われなくなった過程である。もう一つは、上記 *gemynd* の変化に呼応して、中英語ではラテン語からの借用語である *memorie* が古英語独自の「記憶」を表す語の *gemynd* にとって変わりその語彙分野での代表的な語となった過程である。

次章以降、語彙分野の構造について参考になる類義語辞典が存在する現代英語と古英語について、「記憶」を表す語彙分野の構造について調査し、その結果をもとに、この二つの時代の橋渡しとなる中英語で「記憶」の語彙分野がどのような構造を持ち、どのような変遷を遂げているかについて中英語初期の文献での用例を用いて分析を行う。

2. 現代英語の「記憶」を表す語彙分野

現代英語の「記憶」を表す語彙分野は *memory* という名詞およびその派生語で占められている。*Roget's Thesaurus of English Words and Phrases* (Kirkpatrick, 1987) で「記憶」の語彙分野を調べてみると以下の語・句が見つかる

名詞：memory, remembrance, mnemonics

形容詞：remembered, remembering

動詞：remember, memorize, be remembered

副詞：in memory

これらの語の中でも *memory* は使用頻度、意味の多様性を考えるのならば、「記憶」の語彙分野に属する語の中で最も代表的な語であるといえる。*Roget* の類義語辞典を見る限り、現代英語の「記憶」の語彙分野には英語古来の語は無く、ラテン語系の借用語、もしくは借用語が変形したもので占められている。

Memory がいつごろから英語で「記憶」の意味を表すようになったのか *The Oxford English Dictionary* (以下 *OED*) で調べてみると、*OED* は *memory* の初出を1340年の *Ayenbite of Inwite* としている。*Memory* の英語での初出が1340年の作品だとすると、その語が「記憶」の意味を表す英語の単語として確固とした役割を果たすのはそれよりも後の時代であると考えられる。そして *OED* はこの例に以下の定義を与えている。

memory: The faculty by which things are remembered; the capacity for retaining, perpetuating, or reviving the thought of things past. (*OED*)

つまり、*memory* は14世紀になってから英語に流入し、その後現代英語に向かい「記憶」を表す語彙分野での勢力を拡大していったことが推測できる。言い換えるならば、少なくとも14世紀半ばから後半にかけてはまだ「記憶」を表す語彙分野では確固とした地位を確立していないということになる。

Roget の類義語辞典と *OED* の情報を分析することにより、現代英語でみられる、*memory* が「記憶」を表す語彙分野を支配するという状況は中英語後期以降の現象であることが示唆された。

3. 古英語の「記憶」を表す語彙分野

本章では、古英語の「記憶」を表す語彙分野について探る方法として *TOE* での分類を参考にする。*TOE* では、「記憶」の語彙分野はその上位の語彙分野「知的能力」(6. Mental Faculties) の下位の語彙分野として分類されている。この「記憶」の語彙分野06.01.04 Faculty of memory のなかで、名詞の形態をとり、なおかつ simplex (複合語に対する単純語) であるものは *gemynd* もしくは *myne* だけであり、この語彙分野では、これらの語が勢力を保っていることがわかる。さらに、この二語のうちでも *myne* の使用頻度は低いため、実際には *gemynd* がこの語彙分野を支配しているといえる。これに比較して、この上位語彙分野にあたる包括的な「心」を表す語彙のセクションである06 Spirit, soul, heart には *ferhp*, *heorte*, *hreper*, *mod*, *sawol* など多くの simplex が存在する。

この二つの語彙分野の比較は「記憶」の語彙分野で *gemynd* が支配的な立場を取っているという特徴を示す。参考までにあげるならば、「記憶」の語彙分野と同様に「心」の語彙分野の下位分野にあたる「精神」の語彙分野を見ても、多くの語、それも名詞が存在する。一部の語がその語彙分野を支配するという、「記憶」の語彙分野の特徴は明瞭である。意味分野の構造の変化では、その語彙分野に存在するいくつかの類義語が競合し、そのうちのいずれかが支配的な語となるという傾向が強く、「記憶」の語彙分野のように、少数の支配的な語 (アングロサクソン独自の語) の支配から他の少数の語 (ラテン語系の借用語) の支配への変化はあまり見られず、「記憶」の語彙分野は特異であるといえる。

そこで、古英語の「記憶」の語彙分野で *gemynd* という、ゲルマン語に起源を持つ語が語彙分野で優位性を持つという状況から現代英語の「記憶」の語彙分野で *memory* というラテン語に起源を持つ語が取って代わり優位性を持つに至る過程で、どのような変遷があったのかについて、以下中英語の文献での用例を中心に検証を試みる。

4. 中英語の「記憶」を表す語彙分野

前章の考察で、中英語では *gemynd* の主要な意味は「記憶」を表す概念ではないことが明らかになっ

ている。それと同時に *OED* の *memory* の項が示すように *memory* が「記憶」の概念を表す語として頭角を表すのは14世紀以降であることも明らかになった。さらには、現代英語と古英語の二つの時代での「記憶」の語彙分野を比較してみると、それぞれ少数の語（古英語の *gemynd*、現代英語の *memory*）がその語彙分野での中心となっており、その語彙分野で大きな役割を担っていることも指摘された。これに対し、中英語の語彙分野では特出した語が存在せず、その語彙分野での負荷を様々な語が負っている。現代英語、古英語、そして *gemynd*, *memory* と、それぞれの語彙分野での明確な典型的な語が中英語を境にして「いわば」入れ替わるという現象は、中英語期に起きたと推測することができる。

先述したように中英語の類義語辞典は存在しない。中英語にて、この語彙分野がどのような構造をもっているかは、中英語の概念別の類義語辞典が存在しないため現時点では明らかにはなっていない。従って、古英語の類義語辞典 *TOE* との比較で中英語の「記憶」の語彙分野の構造を探ることも、現代英語の類義語辞典と比較することもできない。古英語の「記憶」を表す語は中英語ではどのような意味を表すのに使われているかについては、グラスゴー大学で編纂されている 'Historical Thesaurus' が完成した暁には、英語の語彙分野全体像の一部として「記憶」の語彙分野についても提言されると思われる。

本稿では 'Historical Thesaurus' の完成に先立ち、*Middle English Compendium* などのコーパスや *Middle English Dictionary* を分析し、「記憶」の語彙分野に特定して中英語の文献の分析・検証を行い、その変遷の実態を明らかにしたい。古英語の West-Saxon との連続性を維持するために、中英語初期の South-Western 方言の主要な作品群である「AB 言語」⁽³⁾に属する作品を分析対象とする。具体的には *Ancrene Wisse*, *Hali Meidhad*, *Seinte Marherete*, *Seinte Iuliene*, *Seinte Katerine* そして *Sawles Warde* を研究対象とする⁽⁴⁾。これらは13世紀に書かれたとされる宗教色の強い説話集等で、この言語群は共通した言語的特徴を持っているとされている。South-Western 方言の英語は中英語では標準的な方言であり、作品も数多く残されている古英語の West-Saxon 方言に呼応すると一般的に考えられているため、これらを通時的に比較することにより古英語から中英語への連続性のある変化を表すことができると考えられる⁽⁵⁾。

「AB 言語」に分類される中英語初期の作品を分析した結果明らかになったのは、*gemynd* もしくはその中英語 *minde* の用例がほとんどみられないことである。これは、古英語での *gemynd* の使用頻度と比較すると大きな衰退である。「記憶」を表す概念を描写する場面がこれらの作品に現れないのではなく、そのような部分では他の語が使用されている。動詞形の *munnen*, *munien*, 動名詞の *munegung* などがそうである。これらの語が、調査対象となった作品群で具体的にどのように使われているかについて以下にあげる。

Ancrene Wisse: *munegunge* (1 5a, 14; 1, 7a, 18; 2, 28a, 19; 3, 37a, 25; 4, 75a, 1; 5, 83b, 9; 7, 107a, 23);
muneged (2, 31b, 28; 3, 39b, 14); *munned* (4, 65a, 21); *munegin* (5, 87a, 20); *munegunge* (7, 106a,
 24; 8, 113b, 27),

Hali Meioðhad: munnen (12, 10)

Seinte Marherete: munneð (4, 12; 50, 8; 52, 37), munieð (11, 15; 48, 18), munien (34, 18), munegin (34, 20), munegeð (48, 5; 50, 8)

Seinte Iuliene: munne (3, 11; 11; 531), munien (35, 379);

Seinte Katerine: munie (38, 266), munnest (52, 358), munne (62, 439), munien (88, 621), munneð (124, 875; 126, 891); (130, 90)

Sawles Warde: munegunge (249, 15; 249, 30; 253, 20; 259, 3)

これらの作品での「記憶」の語彙での最も注目すべき特徴として、名詞がほとんど見られなく、動詞、形容詞、動名詞が大半を占めることを指摘できる。名詞と判断されるのはわずかであり、*minde* などの、「記憶」を表す語と思われる用例は *Seinte Marherete* に見られる以下の用例ぐらいである。

Ant as 3e luuieð ow seolf, leofliche ich ow
 þet 3e habben mi nome muchel ine munde; for
 ich chulle bidden for þeo bliðliche in heouene, þe ofte
 munneð mi nome & munegeð on eorðe.
 (Seinte Marherete, 50, 5-8)

Seinte Marherete からのこのくだりは、聖女 Margaret が人々に対し、「自らを愛することを知れば自分（聖女 Margaret）の名をしっかりと記憶に残すことができる」と説いている場面である。この *munde* は文脈から判断して、意味的には「記憶」を表す古英語の *gemynd* と関連があり *minde* と同一であると判断することはできるが、形態論的にはこの語が古英語 *gemynd* から来たものかどうかについて若干の疑問は残る。この *munde* の語源については次章で議論される。

上記「AB 言語」に現れる「記憶」の語彙のリスト、および *Seinte Marherete* からの用例が示唆するように、古英語で使用されていた *gemynd* もしくはその中英語 *minde* は「AB 言語」の作品群ではほとんど使用されておらず、中英語のこの時代では「記憶」を表す単語としての *minde* は消滅しかかっている可能性が極めて高い。そして *minde* が使われないその隙間を埋めるかのように動詞形の *munnen*, *munien*, 動名詞の *munegung*、そして数少ない用例ではあるが *zeme* という名詞が見受けられる。

5. 考察

「記憶」を表す語彙分野は、古英語期から中英語初期にかけて大きな変化をとげていることが本研究の結果明らかになった。*Gemynd* が「記憶」の概念を表さなくなった過程について Smith (1996: 137-8) は「心」を表していた *hyge* がその語彙分野で弱まるにつれ、*hyge* と共に「知的能力」の範疇に入り、「心」と近い概念である、「記憶」や「精神」を表す語である *gemynd* や *mod* が「心」の概念も担

うようになるという経過を経て、最終的に *memorie* の出現を待って、*gemynd* は「心」を表す語彙分野に移ったとしている⁶⁾。Smith (1996) によると「心」を表す語彙分野での *hyge* の衰退によってできた隙間を埋めるべく、*gemynd* が連鎖反応的に semantic shift の経過をたどり、「心」を表す語彙分野へと移動し、それによりできた、「記憶」を表す語彙分野での隙間を14世紀以降 *memorie* が埋めたこととなる。

また、*MED* によると *minde* が「記憶」にとどまらない思考全体をつかさどる能力を表すようになったのは14世紀になってからである。中英語での語形態 *minde* の意味を *MED* で調べてみると、*minde* には14世紀から包括的な「心」を表す用法が現れている。これは *memory* が「記憶」を表して使われた初出の作品の年である1340年と時期的に重なることは非常に興味深い。やはり、「記憶」の語彙分野と「心」の語彙分野の相互作用、およびそれらの語彙分野の語の相互作用があったことを示唆している。

つまり、古英語後期から起きた、「心」を表す語彙分野の変化と連動し、「記憶」を表す語彙分野の構造にも変化が起き、しばらく名詞形が稀に使われる時期を経て *memorie* という借用語の流入によって、「記憶」を表す語彙分野の名詞形が再び安定するという結果にいたるのである。仮説的ではあるが、外国語である *memorie* が「記憶」の語彙分野を席卷する土壌には初期中英語の、名詞形が少ないという、この語彙分野の状態が要因となっている可能性もある。

本稿では中英語の「記憶」の語彙分野の三つの特徴として、1) *minde* がほとんど使用されていないこと、2) 名詞形の使用が少ないこと、3) そして *mun-* という語形態を持つ語が多く使われていることが明らかになったが、最後にその要因について考察を行いたい。1)と2)の特徴が現れる要因については、さらに他の語彙分野につて研究し、それらの語彙分野での現象と照らしあわせて検討する必要がある。また、全ての言語現象について明確な説明を付けることは可能ではない。従って、ここでは上記の特徴の3)について考察を試みる。「AB言語」の文献に現れる「記憶」を表す語彙分野での特徴である、*munnen*, *munegin* などの動詞や動名詞、形容詞が多くつかわれている現象に関して明確な理由は見当たらないが、着目すべき点として古英語での「記憶」を表す語の *gemynd*, *myne* どちらも 'm' の音素を持ち合わせていることが指摘できる。これらの語との音的な関連性とその無意識的な認知が、*munien* や *munnen* などの語が高い使用頻度を持つ土壌を作ったともいえる。また、*munnen* などの語を古ノルド語と結びつける説もあり *mun-* という語形態を持つ語にはスカンジナビア語が影響を与えている可能性もあり、前章で議論した *munde* も古英語 *gemynd* にたどりつく純粋な英語であるとは言い切れない。

本研究によって導かれた結論は、「記憶」を表す語彙分野が経験する中英語の変革は、実は古英語後期からみられる構造の変化にさかのぼるということである。そして、その影響を受け、「記憶」を表す語彙分野は、主要な名詞形が存在しないという中英語初期・中期を経験し、最終的に *memorie* の借用により、安定した現代英語の「記憶」を表す語彙分野へと発達したのである。

* 本稿は、平成14年度井上円了記念研究助成金、平成15年度科学研究費補助金（若手研究（B）課題番号15720114）の成果の一部である。

注

- (1) 本稿では 'lexical field' の日本語訳として「語彙分野」を使用する。
- (2) 本稿では現代英語について言及するときは *memory*、中英語では *memorie* という表記を用いる。それぞれ *The Oxford English Dictionary* と *Middle English Dictionary* の表記を採用した。
- (3) 「AB 言語」とは 'AB Language' に対する日本語訳として本稿で用いる表現である。「AB 言語」とは *Ancrene Wisse* の頭文字 A と Katherine Group の文献が現れる写本 MS. Bodley 34 の B から取ったものであり、これらの文献には共通する言語現象がみられることを J. R. R. Tolkien が指摘し、その後このようにグループ化して総称されている。
- (4) 以下の版を使用した—*Ancrene Wisse* (Tolkien: 1962), *Hali Meidhad* (Millett: 1982), *Seinte Marherete* (Mack: 1943), *þe Seinte Iulienne* (d'Ardenne: 1961), *Seinte Katerine* (d'Ardenne and Dobson: 1981), *Sawles Warde* (Morris: 1868)。なお本稿で使われる作品の総称は、版のタイトルをもとに筆者が恣意的に決定した。引用の出所に関してはページ、行の順番で表す。ただし、*Ancrene Wisse* については Potts ほか (1993) に従う。
- (5) “The south-western variety corresponds to the West Saxon dialect and stretches from Surrey westwards through the counties bordering the Channel, northwards towards a line from the Thames to the Severn.” (Blake: 1996, 137)
- (6) “With the disappearance of *hyge*, *mod*, was left occupying a wide variational space. It is therefore not surprising that *gemynd*, a word which in Old English overlapped with at least one of the senses of *mod*, 'mind', eventually replaced *mod* in that slot; certainly by the end of the Middle English period the appearance of *mod* with the meaning 'mind' has become rare, and —according to the Middle English Dictionary— restricted to poetical and provincial texts.” (Smith: 1996, 137)

参考文献

- d'Ardenne, S. R. T. O. (1961) (編) *þe Liflade ant te Passiun of Seinte Iulienne*. EETS os. 248. Oxford: Oxford University Press.
- and E. J. Dobson (1981) (編) *Seinte Katerine, Re-Edited from MS. Bodley 34 and the Other Manuscripts*. EETS ss. 7. Oxford: Oxford University Press.
- Blake, N. F. (1996) *A History of the English Language*. London: MacMillan.
- Carruthers, Mary (1990) *The Book of Memory: A Study of Memory in Medieval Culture*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Dance, Richard (2003) *Words Derived from Old Norse in Early Middle English: Studies in the Vocabulary of The South-West Midland Texts*. Tempe: Arizona Center for Medieval and Renaissance Studies.
- Dobson, E. J. (1976) *The Origins of Ancrene Wisse*. Oxford: Oxford University Press.
- Gneuss, Helmut (1972) 'The Origin of Standard Old English and Æthelwold's School at Winchester'. *Anglo-Saxon England* 1, 63-83. Cambridge: Cambridge University Press.
- (1985) 'Anglo-Saxons on the Mind', *Learning and Literature in Anglo-Saxon England*, 271-98, ed. Michael Lapidge and Helmut Gneuss. Cambridge: Cambridge University Press.
- Godden, Malcolm and Michael Lapidge (1991) *The Cambridge Companion to Old English Literature*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Harbus, Antonina (2002) *The Life of the Mind in Old English Poetry*. Amsterdam: Rodopi.
- Kirkpatrick, Betty (1987) *Rogee's Thesaurus of English Words and Phrases*. London: Longman.
- Kurath, Hans (1954) (編) *Middle English Dictionary: Plan and Bibliography*. Ann Arbor: The University of Michigan Press.
- Mack, Frances M. (1943) (編) *Seinte Marherete, þe Meiden ant Martyr*. EETS os. 193. London: Oxford University Press.

- McMahon, April (1994) *Understanding Language Change*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Middle English Dictionary* (1954-) (Hans Kurath ほか編) Ann Arbor: University of Michigan Press.
- Millett, Bella (1982) *Hali Meidhad*. EETS os. 284. London: Oxford University Press.
- Oxford English Dictionary* (1989) (J. A. Simpson ほか編) 2nd ed. Oxford: Oxford University Press.
- Potts, Jennifer ほか (1993) *Concordance to Ancrone Wisse: MS Corpus Christi College, Cambridge 402*. Cambridge: D. S. Brewer.
- Roberts, Jane ほか (1995) (編) *A Thesaurus of Old English*. 2 vols. London: King's College Centre for Late Antique and Medieval Studies.
- Smith, Jeremy (1996) *An Historical Study of English: Function, Form and Change*. London: Routledge.
- Tolkien, J. R. R. (1962) (編) *Ancrone Wisse: MS. Corpus Christi College Cambridge 402*. EETS o.s. 249. London: Oxford University Press.

The Historical Development of the Lexical Field of Memory with Particular Reference to Old and Middle English

TOEDA Kazuyoshi*

This paper examines the historical development of the lexical field of memory from Old English to Middle English. Particular reference is made to two prototypical words for memory: Old English *gemynd*, an antecedent of Modern English *mind*, whose word meaning has shifted from 'memory' to 'mind', and *memory*, a loan-word from Latin, which came into use in English in the fourteenth century. Thesauri of Old English and Modern English show that though the lexical field of memory in Old English is predominantly occupied by *gemynd*, a structural change is observed, in which the loan word *memorie* becomes influential in the field towards Modern English. This study describes the development of the lexical field of memory in the transitional period of Middle English, particularly focusing on some thirteenth century Middle English texts.

Key words : lexical field, memory, Old English, Middle English

* An assistant professor in the Faculty of Economics, and a member of the Institute of Human Sciences at Toyo University